

ペルー・アンデス調査隊の派遣

副本部長 加 藤 一 朗

5月27日(木曜日)午後1時過ぎ、日航306号便は、杉原隊長、近藤、日比両君をのせて、ギューンという爆音とともに大阪国際空港の空に消えていった。それから数日、仕事に追われながらも、ギューンという音がうつろになった心に鳴りひびいていた。

今朝(日曜)になってやっと伊丹できいた「探検部では先生が一番お詳しいでしょうから、部報にペルー・アンデスのことを書いて下さい」という内田さんの言葉を思い出した。そう、詳しいといえは詳しいかも知れない。話をペルー・アンデスの過去、現在の事情に限らずに、今次派遣隊の成立からその出発までということにすれば、しかし、この間の事情については詳しくのべればのべるほど何が遠征実現の原動力となったかという点はあいまいになってくるような気がする。それほど、今の世の中で海外にこのような大遠征隊を送るということは困難な大事業なのだ。それゆえ、遠征計画の真価については、派遣隊が帰国後刊行する筈の報告書を熟読して理解されることを切望する。

ここには、山岳、探検両部のO・B・諸兄の多年にわたる努力と協力とが学校当局の認めるところとなり、その絶大な援助のもとに実現のいとぐちがひらかれたということだけを記しておこう。同時に、この関大最初の遠征隊におくられた有形無形の声援、好意は実に無数であったといってもよいが、そのような点については、報告書をよく読まれたい。

さて本校創立80年記念事業の一環として派遣されることになった「関西大学ペルー・アンデス学術調査隊」の「派遣委員会」は学長・中谷敬寿教授を委員長に、校友会長・岡野衛士、学術部長・壺井義正、学生部長・桜田 誉、総務課長・羽野堅二、企画調査課長・田中一郎の各氏によって構成され、副本部長に末永雅雄教授、筆者が任命され、派遣隊員として、杉原弘人(隊長)、神月 彰(副隊長・現地参加)、中野 力、久野邦雄、池内嘉宏、米川利美、長谷川裕一、近藤嘉彦、日比達一の各氏が夫々任命された。

実質上の本部は、天六学舎の企画調査課に置かれ事務関係の膨大な仕事はおもに同課員の方々によってなされた。装具・食糧（総計約3トン半）の集積、梱包は有隣館2階でおこなわれた。

過日伊丹から発った3隊員と神月隊員を除く5隊員は5月3日横浜から「健島丸」にのりこんだ。全員がペルーの首都リマで会って、いよいよ調査・試登にのりだすのは6月上旬である。

試登の目標2峰はいずれもワイワシユ山群の中にある。これはリマの北方約500 Km、コルデイレラ・ブランカ（やはり山群）の南に連なり、南北90 Kmにおよぶ山群である。64米級の高峰が少なくない。今回アタックの目標になっているのはレウラ・チコ峰（6265 m）とヒリシヤンカ・ノルラ峰（6015 m）の二つである。山岳、探検両O・B・諸兄が日本アルプスでどれだけ鍛えぬかれているとしても、わが国の山岳とは高度が比較にならぬほど高い。

大体人体の高度順応は54 mが境といわれる。すでに現地にある神月氏からも、「54 mの地点では寒さは著しいが、空気の稀薄さはあまり感じない」と知らせて来ている。問題は高度54 m以上の地点で活動する場合である。高度がそのように高い上に、シウラ・チコ峰はとりわけ険阻な峰として知られている。試登隊員諸兄の困難は想像以上のものがあるろう。本学創立80周年を記念して、海外未踏峰の征服はもちろん、すばらしいニュースにちがいないが、あくまでも犠牲者を出してはならない。

隊長杉原教授、試登隊長日比氏の好判断とこれに従う全隊員の一致協力をはるかなる空に向い祈ってやまない。

一方にこのような試登の困難をひかえながらも、大学の事業として、遠征隊はペルーの風土や歴史に関する学問的な調査をないがしろにすることはできない。そのいみでも、今回えらばれた隊長、副隊長に最適の指導者である。杉原教授はわが国では新しい医動物学の分野で早くから活動をつづけ、とくにタニシに寄生する病原菌研究の権威である。すでに探検部員とともに風土病研究のため、沖縄に渡っているが、今回はペルーの風土病であるオロヤ熱、エズブンデリアを媒介するチヨウバエ科の採集と分布調査、さらには東南アジア、中国南部に分布する東洋瘤腫とエズブンデリアとの比較が研究対象となっている。神月助教授また地震学の権威として、わが国に似て地震が多く、しかも、地理

的に対蹠地 (antipodes) にあたるペルーの地震観測所を訪れておこなうわが国の地震との比較研究の成集は期してまつべきものがある。特筆すべきことは両先生の研究はいずれも、ペルー国民からも協力が要望されている分野であるということである。他の隊員諸君も夫々調査分担をもち、あるいは先生方の研究の補助者として、あるいは単独調査の上で数々の成果をもたらすにちがいない。とくに久野隊員は永く未永先生の下で考古学研究の訓練をうけている。今回は期間・費用の点で発掘は無理であるとしても、ペルー各地に散在するインカ文明の遺跡あるいはそれ以前の先史文明の遺跡、遺物について、専門家としての観察をおこない、今後の調査への重要な指針をもちかえることであろう。

今回の遠征計画の準備期から出発までの過程をつぶさに見聞してきた筆者の印象は、海外遠征には各隊員に多面的な各種の能力、経験が要求されるということである。費用は限られている。したがって人員も限られてくる。仕事は無限にある。山に登るだけが、調査をするだけが仕事とはいえなくなる。装具・食糧・医薬などの集積と梱包。貨物の港への輸送と船積み。通関と輸送の為の書類の作成。交通公社の助けがあるとはいえ、外務省・大使館などに関する渉外事務。必要な語学の修得。船・飛行機の予約。会計事務・資金準備の必要を一応除外して考えてみても、大ざっぱに言ってこれら仕事があり、これらの仕事は順序よく現われるのではなく、短期間に集中するきらいがあり、またその大部分は現地までもつきまとう。出国・帰国に際しては挨拶状の印刷・発送もせねばならず、帰国後の調査、会計報告も必須である。であるから海外遠征の準備としては、強固な意志・体力の養成、何らかの特色をもった調査技術を身につけることばかりでなく、上記各方面に関する種々の仕事を処理することのできるきわめて多面的な活動力が要求されるということをつくづく痛感した次第である。